第30回 特別展

よみがえる
古墳時代の響き

鈴

もくじ

開催にあたって …… 2

序章 鈴について …… 3

第1章 馬を飾った鈴 …… 5
三環鈴 …… 6
鈴杏葉 …… 10
鈴付馬具 …… 13
コラム 馬鐸 …… 16
馬鈴 …… 17
馬形埴輪 …… 19
コラム 復元！馬形埴輪 …… 21

第2章 鈴を飾った鏡 …… 23
鈴鏡をもつ女子埴輪 …… 26

第3章 動物埴輪と鈴 …… 27
コラム 須恵器の鳥にも鈴 …… 29
コラム 鐸形土製品 …… 29

第4章 ムラの鈴 …… 30
コラム 二重鐘の響き …… 33

第5章 装いの鈴 …… 34
足緒の鈴 …… 38
鈴釧 …… 39

終章 鈴の響きが語るもの …… 41

論考 群馬県内出土の鈴付馬具について　大野義人 …… 45

展示資料目録 …… 56
参考文献 …… 57
ご協力いただいた協力機関と
ご協力いただいた方々 …… 58

例言

1. 本書にかみつけの里博物館第30回特別展「鈴　―よみがえる古墳時代の響き―」の展示解説書として編集した。

2. 本特別展の企画はかみつけの里博物館で決定し、構成は原佳子（本館主査）が行った。櫻山千鳥（本館主査）が補佐し、小澤麻美（本館専任職員）、高橋亮佑（本館臨時職員）の協力を得て、小泉勲明（本館次長）が総括した。

3. 本書の執筆・編集は、原佳子が行った。

4. 論考は、本特別展関連行事として実施する講演会の発表要旨を掲載し、大野義人（高崎市教育委員会文化財保護課　主任学芸員）が執筆した。

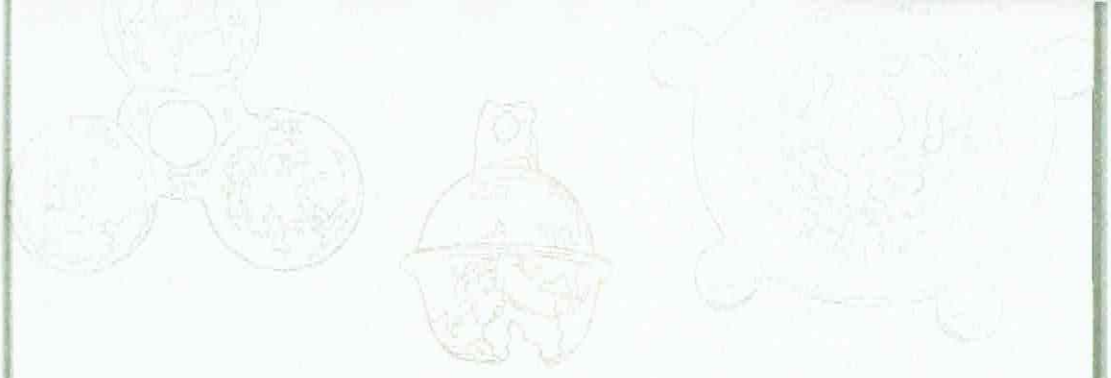
5. 本特別展およびその関連行事は以下のとおり実施される。
かみつけの里博物館第30回特別展　「鈴　―よみがえる古墳時代の響き―」
○会期　令和3年12月11日（土）～令和4年2月28日（月）　○会場　かみつけの里博物館　企画展示室
○関連行事
◆講演会　令和4年2月6日（日）午後1時半～　かみつけの里博物館　研修室
事前申し込み要 定員30名
演題「鈴の音　そこのけそこのけ　お馬が通る　―上毛野と鈴付馬具　」
講師　大野義人　（高崎市教育委員会文化財保護課　主任学芸員）
◆ギャラリートーク（学芸員説明）　各日とも午後1時半～　企画展示室
事前申し込み不要　先着8名
令和3年12月12日（日）・令和4年1月9日（日）・2月11日（金・祝）
◆おすすめのいっぴん（資料解説動画の放映）　企画展示室
事前申し込み不要
令和3年12月19日（日）～令和4年2月27日（日）の毎週日曜日　各日午前10時～午後4時
※関連行事は新型コロナウィルス感染状況により、変更になることがあります。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

6. 本特別展展示資料の所有者及び所蔵者は巻末「展示資料目録」に明示した。

7. 掲載写真の提供者は、掲載写真の下に明示した。提供者の明示のない写真は当館撮影の写真である。

8. 遺跡名称は紙面の都合により略称を使用したものもある。但し、東京や初出はできる限り正式な名称を用いた。
《例》東原古墳群25号墳　→　東原25号墳

9. 本特別展開催にあたり下記の機関より協賛をいただいた。
朝日新聞前橋総局、NHK前橋放送局、FM GUNMA、共同通信社前橋支局、
群馬テレビ、群馬とみうり、産経新聞前橋支局、J-COM群馬、時事通信社前橋支局、
上毛新聞社、高崎観光協会、東京新聞前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、ラジオ高崎（五十音順）



開催にあたって

鈴は涼やかな音を紡ぎ、人々の心を和ませてくれる現代人も好む音具（音を出す器具）です。その始まりは古く縄文時代にまで遡ります。

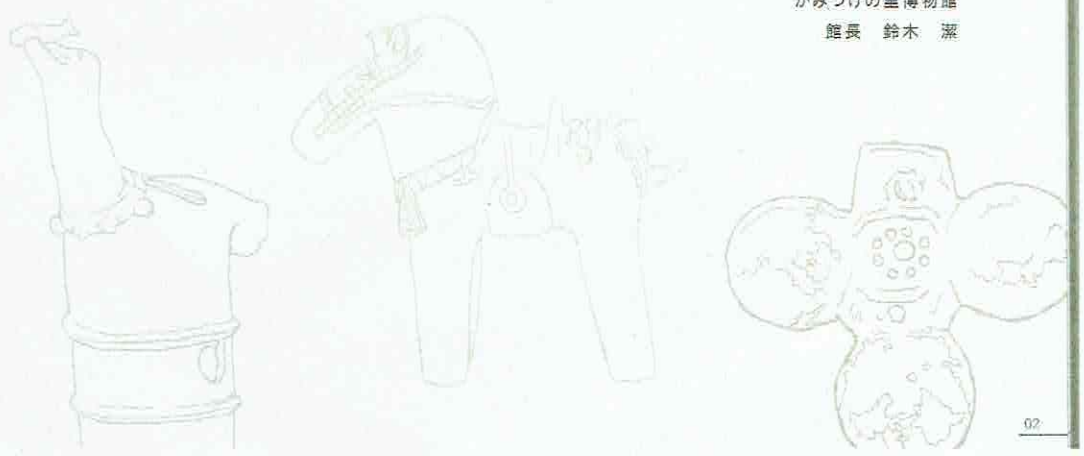
古墳時代の鈴がそれ以前のものと違うのは、金属製鈴が登場したことで、製作方法を含め、朝鮮半島から伝来したと考えられています。人々は鈴を好み、馬具、装身具を始め、飼っていた動物にも鈴をつけています。鈴をつけた資料は日本各地の古墳から出土していますが、出土地はやや東日本に偏りがみられ、中でも群馬県はその質、量ともに豊富な地域といえます。本展示では、県内から出土した鈴付資料を多数紹介するとともに、どのように鈴を使用したのかがわかる埴輪も展示いたしました。

そして、古墳時代の鈴やその使い方を展観することで、鈴の果たした役割について考えます。人々はなぜ鈴を多用したのか、当時の社会的な背景についても考えます。

さて、本展ではかみつけの里博物館初めての試みとして、「音と映像の展示」をしています。鈴の響きを実際に耳にすることで、来館者の皆様に「鈴」をより身近に感じていただきたいと考えたからです。展示した鈴はどれも貴重な文化財ですので、細心の注意を払い、撮影をさせていただきました。こちらもじっくりとお楽しみください。

末筆ながら、本展開催にあたり、貴重な資料の出品や写真の提供、録音録画公開の許可などいただいた所蔵者の皆様、ご指導いただきました関係諸機関、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

令和3年12月11日
かみつけの里博物館
館長　鈴木　潔



第1章 馬を飾った鈴

馬を飾った装具を「馬具」といいますが、馬具の名称はなかなか複雑で馴染みがない私たちには理解しにくいものです。例をあげると、馬を制御する「轡（くつわ）」、轡を頭に固定する「面繋（おもがい）」、乗り手の意志を伝える「手綱（たづな）」、乗る場所である「鞍橋（くらぼね）」、足を掛ける「鐙（あぶみ）」などがあります。この他に鞍橋から胸にかけて巡らす「胸繋（むながい）」、鞍橋から尻を飾る「尻繋（しりがい）」などがあります。面繋、胸繋、尻繋を三繋（さんがい）といいます。この他、装飾として用いられる馬鈴、馬鐸（ばたく）、雲珠（うず）、辻金具（つじかなぐ）などがあります。

これらの名称の多くは平安時代につけられた呼び名を基にし、考古学者がつけたものです。

本章ではこれらの馬具に用いられた鈴を紹介します。

コラム 馬具とは

馬に乗る

鞍橋（くらぼね）
座（くら）に由来します。馬の背に載せ、その上に人が乗ります。

障泥（あおり）
泥除けで、鞍の下に下げます。

鐙（あぶみ）
足踏（あぶみ）に由来します。馬にまたがる際の足かけでしたが、次第に常に足を置き体の安定をはかるほか、馬のスピード調節をするものとなっていきました。

馬を操る

轡（くつわ）
口輪（くちわ）に由来します。馬の口にくわえさせて馬に乗る人が引く手綱につながります。

鏡板（かがみいた）
轡につける鏡板には鈴つきのものがあります。（鈴つきの鏡板については後述します。P15）

馬を飾る

杏葉（ぎょうよう）
面繋、胸繋、尻繋のどこにもつける場合があります。鈴をつけた「鈴杏葉」は馬形埴輪の仕様例をみると尻繋につけるようです。（鈴杏葉は後述します。P10）

馬鈴（ばれい）
馬形埴輪では胸繋や尻繋についています。

雲珠（うず）
腰骨の一番高いところ、尻繋の中央につけ、ベルトをつなぎます。鈴つきの雲珠も出土しています。（観音塚古墳出土P15）

三環鈴（さんかんれい）
馬具と一緒に出土します。詳しくは「三環鈴」（P6）をご参照ください。

辻金具（つじかなぐ）
ベルトが交差するところを支える金具です。一般に4脚のものを辻金具、5脚以上のものを雲珠と呼んでいます。観音塚古墳には鈴つきの辻金具もあります。（P15）

「三環鈴」－さんかんれい－

環の周縁のほぼ三等分の位置に3個の鈴が配置された青銅品です。鈴が2個のものや4個のものも少数ですが見られます。中国や朝鮮半島でも発見されており、大陸や朝鮮半島から伝わったものではないかと考えられています。日本では5世紀中頃から6世紀前半の古墳から出土することが多く、群馬県も同様です。

古い時期のものは環と鈴の接合が浅いか極端に短い支脚でつながる小型品ですが、新しい時期のものは鈴が環に食い込んだ形となる大型品です。

馬具とともに見つかることが多い三環鈴はここでは馬具として扱いましたが、被葬者の腰部などから見つかる例もあり、服飾品として使用されたこともあるとみられます。

三環鈴の多くは鋳造で作られたと考えられています。環鈴の音を鳴らす丸は石を使用する例が多く、今回展示した資料は観察によると石製の丸「石丸（せきがん）」を使用しています。どれもきれいに磨かれ滑らかな楕円形の丸でした。

馬具の装着を復元した模型（しだみ大塚古墳）　名古屋市教育委員会　提供

三環鈴の装着例（しだみ大塚古墳）

群馬県内の三環鈴出土遺跡

No	遺跡名（　）内は上毛古墳綜覧の番号	数	環形	出土地	時期
1	不明	1	不明	渋川市黒保根町宮	5世紀後半
2	吉澤松塚11号墳	1	帆立貝形	佐波郡玉村町吉澤	5世紀後半
3	観音山古墳（岩鼻村22号墳）	3	前方後円	高崎市綿貫町字観音	6世紀後半
4	下芝谷ツ古墳	1	方墳	高崎市箕郷町下芝谷ツ	5世紀後半
5	四ツ谷古墳	1	円墳	高崎市箕郷町上芝字西ツ谷	5世紀後半
6	大山鬼塚古墳（郷蔵村12号墳）	1	円墳または帆立貝形	甘楽郡甘楽町白倉字西大山	5世紀末

※（　）内は「上毛古墳綜覧」の古墳番号
　　は今回展示している遺跡